

『したたる恋の足跡』

著: 葵居ゆゆ

ill: ビリー・バリバリー

「大丈夫か、千空。どこか怪我してないか、痛いところは？」

「……ちょっと力が抜けただけ。終わってすぐだったから」

肩を抱いたまま気遣わしげに顔を覗(のぞ)き込む澄見の視線を避けるように、千空は顔を背けた。見られたくない、と思う気持ちを押さえつけてわざとゆっくり股間からTシャツをどけ、身体を晒(さら)してそれに腕を通す。澄見が気まずそうに視線を逸らすのがわかって、千空は笑いたくなった。

見るのもいやなら来なければよかったのに、と声が出かかって、かろうじて飲み込む。子供っぽいわがままや身勝手さを見せたくはなかったし、できるだけなんともないように振る舞いたかった。

(後悔なんかしてない)

セックスなんてたいしたことない、ただの行為だと内心で言い聞かせながら立ち上がり、汚れてしまった気がする身体にそのまま下着をつける。よろめかないよう注意深くジーンズを穿(は)くと、ふいに澄見の手がうなじに触れた。

びくん、と震えて振り返る。澄見は眉(み)間(けん)に皺(しわ)を寄せ、ため息をついた。

「帰ったら、シャワー浴びるぞ」

「……帰るって、どこに」

「ホテル」

言うなり澄見は千空のデイパックを拾い、右手で千空の手を取った。強く握って引っぱられ、抗(あらが)いかけて、結局千空は彼に従った。

馬鹿みたい、と小さく呟く。こんなときでさえ、澄見と手をつなぐのが嬉しい自分の心が馬鹿らしい。

ドアの外には千空を抱いた男と、ホセと呼ばれた男が所在なさそうに立っていた。ホセのほうが、千空を気にしながら「ジョアンは悪くないから許してやってよ。むしろ、彼でよかっただろ」と澄見に言う。

澄見は無表情だったが、それでもかるく頷いた。たぶんホセは澄見の友人の友人、というような人間なのだろうと、遅ればせながら千空にも察しがついた。バルセロナには澄見の知り合いがたくさんいる。

ほっとしたようにじゃあまたな、と肩を叩くホセに手を挙げて応えて、澄見は千空をそばまで引き寄せた。

「歩けるか？」

「——そんなにやわじゃないよ」

本当は歩くと、尻からなんともいえない衝撃が走って不快だった。まだなにかが詰め込まれているような異物感があって、脚運びがどうしてもぎこちなくなる。

澄見は千空を見下ろし、少しのあいだ迷って手を離した。千空ががっかりしたのもつかのま、澄見は肩にデイパックをかけ直して千空の背中に右手を回し、かがむようにして膝裏に左手を回してきて、ふわ、と踵(かかと)が浮いた。

「……澄見っ」

「おとなしくしてろ。重くなったな」

一瞬だけ、澄見の唇の端に笑みが浮かぶ。それを見たらぼうっと顔が熱くなって、千空はぎゅっと目を閉じた。

横抱きの格好が恥ずかしい。同時に、腕や脚に触れた澄見の手の大きさと、厚みのある胸から伝わる鼓動が、舞い上がりそうに嬉しかった。

(どうして澄見は、僕がほしいものを、いつもあっさり見抜くんだろう)

澄見、と名前を呼びたくなる。

澄見、僕——僕、どこまでだってあなたを追いかけてたいよ。追いかけるためならなんだってできるって思って、でも、いやだったんだ。澄見じゃない誰かが僕の身体に触るのが。唇って、澄見のじゃないと、全然気持ちよくないね、澄見。

打ち明けてしがみついて、抱きしめてほしくなる。

でもそれができるのは子供だけだ。自分で責任の取れない子供の、することだ。

嬉しさと寂しさともどかしさをぐっと飲み込んで、それでも少しだけ澄見の肩に頭を寄せると、嗅ぎ慣れた澄見のにおいがした。

風に抱かれているみたい、とうっとり思う。風か、そうじゃなかったら、空。

広くてあたたかくて、心地好い。

澄見は千空を抱いたまま古いエレベーターで下り、五分ほど歩いたホテルの前で千空を下ろした。狭くて古めかしいフロントにいた男があくびまじりに鍵を手渡してくれ、これもまた狭いエレベーターで三階に上がると、薄暗い廊下にどこかの部屋から物音が聞こえた。

澄見はめったにホテルは使わないのに、と思いながら黙って部屋に入ると、想像したよりもずっと室内は清潔だった。

「そこがバスルームだから、シャワー浴びてこい」

「——うん」

なにか言いたかった。でも、うまく振る舞うことができずに、千空は逃げるようにバスルームに入った。急いで服を脱ぎ、バスタブのないシャワーだけのブースに入って頭からお湯を浴びる。綺麗にして、そしたら澄見に言おう。キスしてって言おう。

そう思うのに、たっぷりのソープで肌を擦っても、皮膚の一枚下に張りついた弱い不快感は消えなかった。

あの男が嫌いだとは今も思わなかった。バーではいい人だと思ったし、泊まる場所がないから一晩過ごそうよ、と誘ったら、近くに友達の部屋があるよと言ってくれて、千空に触れるときもけっして乱暴にはしなかった。

なのに、どうしてこんなにいやなんだろう。

ため息をつきそうになって堪え、いつまでも浴びていたい気のするシャワーをとめてブースの外に出ると、小さい鏡の中からうちひしがれた自分の顔が見返してきた。

途方にくれたみたいな表情。

そこから頼りなく伸びた首の右側に赤い跡がくっきりついていて、千空はそこを手で覆った。——さっき、澄見が触れたのはこれだったのだ。

淡い嬉しさにほどけかけていた心がぎゅっと冷える。きっと澄見は呆れているだろうし、がっかりしているだろう。バスルームから出たら怒られるだろうし、千空の言い分を聞いてはくれないだろう。言い分といえるほどの理屈もないのは、千空自身がよくわ

かっていた。

置かれていたバスローブだけを羽織って蹠(そう)跟(ろう)とバスルームのドアを開けると、澄見は暗い青のカバーのかかったベッドに腰掛けて煙草を吸っていた。出たはいいものの歩み寄ることもできない千空を一瞥し、ぽん、と自分の隣を叩く。

「おいで、千空」

「——でも」

「いいからおいで」

二度命令されると逆らえなかった。千空が澄見のいうことで聞けないのはたった一つだけだ。

足音を忍ばせるようにして近づき、少しだけ離れて澄見の横に座る。右側を澄見に見せなければいけないのがいやだった。でも隠せば、後悔していると思われる。

あえて背筋を伸ばして座った千空を見やり、澄見が訊いた。

「ちゃんと全部洗えたか？」

「……うん」

「中も？」

あっさり訊かれて羞恥で顔が火(ほ)照(て)った。ゴムしてたから平気、と掠れた声で呟くと、澄見が煙草を消した。ぎっ、とベッドの軋(きし)む音に身体が竦む。俯いて立ち上がろうとしたら、振り返った澄見が肩を押した。

背中からベッドに倒れ込み、逆らうまもなく両膝を掴まれて、ざあっと肌が粟立った。

本文 p68～74 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>